

説教 『平和と迫害』 山本 護 牧師
聖書 出エジプト記 23:4~5/マタイによる福音書 5:9~12

「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる(マタイ 5:9)」。幸いであるにせよ「神の子」では大仰過ぎないか。「～は幸いである」と九回もくり返される山上の説教。前四つはその人々の状態であり(5:3~6)、後五つは主体的な行為として示されている(5:7~11)。中でも、「平和を実現する人々(5:9)」と「義のために迫害される人々(5:10)」は、とりわけ主体的であるように思われる。

その頃、地中海世界は「Pax Romana/ローマの平和」。強大な帝国が支配していて平穏ではあった。税金は取られても、戦争は無く、神殿はにぎわい、交易によって市場は活気づき、悪くないではないかと思う。イエスはそれでも「平和の実現」を求めた。どうであれば平和なのか。武力によって平定された秩序は、神の調和とは程遠い、ということか。ヘブライ語の挨拶「シャーローム/平和」はただの安寧ではなく、神に支配(国)された完全な状態のことで、いわば救いの目標を示している。

憲法 9 条に抵触しても、日本政府が海外で軍事活動をしたがるのは、「Pax Americana」におもねる子分体質のせい。沖縄の人々は、こんな身売り政治とぶつかっている。「義のために迫害される人々は幸いである、天の国はその人たちのものである(5:10)」。「天の国(支配)」とは、現在の沖縄のような状態を言うのであろうか。隅々までかっちりした義ではなくとも、今私たちは沖縄に学ぶことがある。「天の国は～」は、「心の貧しい人々」の箇所でも続けて語られている(5:3)。つまり「心の貧しい人々」とは、発言と行動を封じられた被抑圧者ではなく、「義のために迫害される人々」のことではないのか。そう考えてみると、並列している「平和を実現する人々」のイメージも新たに膨らんで来る。

私は貧しくはないが、防衛予算の税金を少ししか支払わず幸いである。ソフトバンク社長の税金がミサイル数発なら、私の税金は弾丸一発か。でもその一発が誰も殺しませんように。キング牧師がガンジーから学んだ非暴力直接行動は誰にでも可能で、「Pax Americana」の中心部で起こった。当初は無駄骨に見えたが、心の貧しい人々が彼の国の政治を変えた。あの時、あの場に、天の国は現れた。

私たちは無力だが虚しくならない。むしろ無力であることを幸いとしよう。「もし、あなたを憎む者のろばが荷物の下に倒れ伏しているのを見た場合、それを見捨てておいてはならない。必ず彼と共に助け起こさねばならない(出エジプト 23:5)」。心の貧しい者にも敵はいる(23:4)、憎む者もいる(23:5)。だが、荷物の下敷きになった敵の驢馬は、彼と協力して助ける。するとどうなるか。相互の関係が新たに始まる、と思う。金があって多くの作業員にやらせたなら、新たな関係は生じないだろう。

聖書のギリシア語(enemikos)でも、英語(enemy)でも、「敵」と「憎悪」は同じ言葉であり、その奥には「悪魔」という謂がある。イエスは「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈れ(5:44)」と命じた。憎み合いは悪魔を喜ばせる。イエスは敵を愛し、敵のために祈り、殺された。ガンジーもキング牧師も殺された。愛し、祈る神の子は殺され、多くの人を生かす。「平和を実現する人々は幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる(マタイ 5:9)」。平和を祈り「神の子と呼ばれる」ことは決して大仰ではない。



【おまけのひとこと】

一殺多生は右翼の標語 民のために一悪を殺す 独逸の敬虔な神学者がこれに応じた 彼は殺され後に問いを残した 誰が戒めに背く十字架を負うのかと 御心は表示できない 状況の中でこそ